



2011年3月23日放送

漢方医人列伝 「湯本求真」

あきば伝統医学クリニック 院長 秋葉 哲生

湯本求真は、1876年（明治9年）に現在の石川県七尾市鶴浦町の素封家に生まれました。和田啓十郎より4年後であったわけです。本名は湯本四郎右衛門と名のられました。求真はその号であります。先生は、1901年（明治34年）年に金沢医学専門学校を卒業して医師となりました。金沢医学専門学校は、今日の金沢大学医学部であります。先生は首席で卒業したと伝えられ、優れた資質の持ち主であったことが伺えます。

当時の明治政府は、1874年（明治7年）年に医制を公布して西洋医学だけを正式な医学と認めることを内外に明らかに致しました。したがって医師になろうとする人は西洋医学を学ぶ必要がありました。漢方を学んでも医師にはなれないので、漢方医学を学ぼうとする人などはいなくなりました。さらに漢方医学自体も旧弊なもの、古い徳川時代の遺物であるとして人々の蔑視の対象とさえなったのでした。それまで漢方医であった多数の医師も、なだれをうって西洋医学の知識を学び始め、西洋医師として看板を掛け替えたのです。

このような時代にあって、漢方医学が優れた治療医学であることを一冊の書を以て敢然と主張した一人の医師が居りました。それが、前回の「医人列伝」で寺澤先生が解説された「和田啓十郎」でした。彼は数々の実例を挙げて、漢方医学が西洋医学に比べて優れた治療医学であること、江戸時代以来の漢方医学の伝統を滅ぼしてはならないと、自費出版した著書『医界之鉄椎』を掲げて世の中に問いかけました。1910年（明治43年）のことです。

湯本先生が医師になって約10年が経った頃に、先生の身边に大変なことが起こりました。先生はご自宅に医院を開業されていましたが、そのころ七尾に流行していた疫痢のために、3歳の長女俊子を失ってしまったのです。3歳ですからかわいい盛りです。あろうことかそれに引き継いで、祖父母をも同じ病で亡くしたのであります。先生は最愛の家族3名を2ヵ月の間に相次いで失う悲運に遭遇したわけであります。ご自分が治療に当たったにもかかわらず、そのような最悪の結果となったことは、先生にとってなによりの痛恨事であったということができましよう。

後に書かれた『皇漢医学』第1巻の序文で、「修得せる医術の頼み少なきを恨み、煩悶懊惱すること数月、精神殆んど錯乱せんとす」と、先生は当時の苦悩を語っておられます。この苦しみの時期に、先生は出版されたばかりの『医界之鉄椎』を読んだわけであります。一読して自分の進む道は此処しかないと決断した湯本先生は、ただちに和田啓十郎に弟子にして欲しいとの手紙を送ります。

しかし、返ってきた啓十郎の言葉は意外なものでした。弟子にはしないが、同じ漢方医学の道を歩む同志としてならば教えようとの返事であったのです。事実その後啓十郎は、数多くの蔵書を求真に送ったり、おびたしい手紙により質疑を交わしたりして、惜しめない援助を注ぐのであります。それも、求真の優れた才能と情熱とを見抜いたためでもあったでしょう。さらに、1915年（大正4年）に刊行された『医界之鉄椎増補改訂版』では、当時無名であった湯本求真の43ページに及ぶ論稿を掲載すると共に、求真による序文を付しています。これらは和田啓十郎による、漢方家湯本求真のお披露目の席であったとみなすことができるでしょう。

それと同時に、湯本先生の猛烈な精進ぶりも伺えます。1910年（明治43年）から漢方を学び始め、1915年（大正4年）にはすでに堂々たる論文を『医界之鉄椎増補改訂版』に載せるなどは、なみ大抵の才能ではなかったことを思わせます。しかも、十年後に出版する代表的な著作である『皇漢医学』における基本的な考え方がすでにここにあらわれており、1941年（昭和16年）に死去するまでそれは一貫しておりました。

湯本求真が私淑した和田啓十郎は、『医界之鉄椎増補改訂版』の出版の翌年、1916年（大正5年）に満44歳でこの世を去りましたので、湯本求真は師と仰ぐ和田啓十郎に一度も会うことはありませんでした。つまり直接面談する機会はさまざまな事情から得られなかったのです。このようなことも、今日の若い人々には想像することが難しいかもしれません。湯本求真先生は1941年（昭和16）年に九州旅行の帰途、姫路において急性胃腸炎を発せられて亡くなられました。64歳を以ての一期でありました。

湯本先生の著作は、まとまったものとして1931年（大正6年）の『臨床応用漢方医学解説』、および1927～28年（昭和2年から3年）の『皇漢医学』があり、影印版などで現在も入手が可能です。『皇漢医学』は発刊以来、わが国の漢方医学のあり方を永年規定した基本資料でした。先生はまた、1934年（昭和9年）に創刊され、1944年（昭和19年）まで存続した日本漢方医学会の機関誌・月刊『漢方と漢薬』にも時々論稿を寄せております。

先生のご業績は、第一に和田啓十郎が先鞭をつけた漢方医学復興の気運を、大正年間から昭和初期にかけて、より拡大し確実なものとしたことです。

当時は浅田宗伯の流れを汲む浅田流、森道伯の一貫堂医学、江戸時代以来の累代の漢方医家である奥田謙藏など、各学流がおのおの存在していました。それらは時には反目して、いわゆる足の引っ張り合いも時に見られましたが、湯本先生の下に集まった大塚敬節氏や一貫堂医学の矢数道明氏のような優れた見識の漢方研究者によって、ばらばらに存在していた漢方各流派の大同団結が果たされ、ともに漢方医学の発展のために一致協力して活動することになったのであります。それが先に述べました日本漢方医学会であり、その具体的な顕れが月刊ジャーナルである『漢方と漢薬』の刊行でありました。

湯本求真のもとには、漢方医学を研究する多くの医師や薬剤師、鍼灸師が入門しました。医師として大塚敬節、山城正好。薬剤師として清水藤太郎、荒木性次、佐藤省吾などが代表的な方々です。

湯本先生の処方には特徴がありました。すなわち必要あれば、通常の薬用量を超えて投与されたことです。1935年（昭和10年）『漢方と漢薬』第2巻第10号の「求真医談」という随筆欄にある処方を紹介しましょう。そこでは、肺結核患者への処方として、小柴胡湯加黄連 3.5g、石膏 140.0g、麦門冬 10.0g、合桃核承気湯、3倍量桂枝茯苓丸、さらに解毒丸 1.5gを兼用するとされています。ここで最後に述べている解毒丸とは、大正6年に刊行された湯本求真著『漢方医学解説』にある丸剤で、大黄、桃仁、 Pb 虫、金硫黄（アンチモン化合物）、甘汞（塩化第一水銀）を蜜丸としたものであります。桂枝茯苓丸を3倍量用いることに加えて、石膏 140.0gという大量を用いていることが目を引きまします。わが国の薬用量よりも多く用いることで知られる中医学派でも、石膏は通常 9~30g、多量用いる場合でも 60~120gとされています。

140gとはそれを上回る投与量であり驚かされますが、彼は1934年（昭和9年）の『漢方と漢薬』第1巻第2号の「百日咳の療法」で、「石膏の用法であるが、古来石膏を用ひる事を非常に恐れるが甚だいわれなき事で、石膏は少量用ひたのでは更に効がない、吾人は平常、大人量として 20~100g、甚だしき時は 150gまで使用する」と述べています。この投与量の破天荒なことはすでに述べた通りで、伝統的な考え方に捉われない求真の面目躍如といったところではあります。私はこのような、投与量に依存した効果を確信していた湯本求真に、西洋医学の秀才とはやされた若き求真の面影を見る思いがするのです。

湯本先生のお墓が現在は千葉県山武郡横芝光町にあることをご報告して、私のお話を閉じたいと思います。大東亜戦争末期に東京から千葉県の横芝町に疎開してこられた湯本求真のご遺族は敗戦後も留まられて、その後湯本先生のお墓も当地に移されました。横芝町は私の隣町です。ご一報いただければいつでも先生の墓所にご案内することをお約束して、私のお話を閉じたいと思います。